

人代名詞の社会心理学的考察

佐久間, 章
九州大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/6796123>

出版情報 : 言語科学. 3, pp. 47-53, 1967-03. 九州大学教養部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



人代名詞の社会心理学的考察

佐 久 間 章

会話の際に、当面の話相手を指していうことは、いわゆる対称（第二人称）の代名詞の使いかたには、話者とその相手との間の人間関係が微妙に反映されるので、種々異なった対人的場面において、それがどのような現われかたをするかを観察することは、社会心理学的にきわめて興味深い問題である。現代の英語においては、対称の代名詞として、一人の相手に対して複数の相手に対しても、“you”という一種類の形式が共通に用いられるが、フランス語では、単数の“tu”と複数の“vous”の二種類の形式の区別があり、“tu”は相手に対して親しみをもっていうときに用いられるのに対して、本来複数形である“vous”を一人の相手に対して用いる場合は、ていねいな、またはよそよそしい表現となる。同様なことは、他のヨーロッパ諸言語においても見られ、ドイツ語では“du”と“Sie”，イタリア語では“tu”と“Lei”，スペイン語では“tu”と“usted”が用いられている。英語でも、かつては“thou”と“ye”との間に同様な区別があった。これらのヨーロッパ語における対称の代名詞は、その起源をラテン語の“tu”と“vos”にさかのぼることができる。対称の代名詞に見られるこのような区別は、ヨーロッパ語以外の言語においても認められる。たとえば、日本語においては、“アナタ”，“キミ”，“オマエ”，“キサマ”などの形式が第二人称の代名詞として用いられるが，“アナタ”がていねいな表現であるのに対して，“キミ”，“オマエ”，“キサマ”などは親しみを表わす場合、あるいはぞんざいな言いかたをする場合の形式となっている。ただ、日本語の場合には、ヨーロッパ諸言語と異なり、第二人称だけでなく第一人称についても、それに対応する区別があり、対話の場合において、話者自身を基準として相手を定位すると同時に、相手に対して話者自身を定位するという相互関係が成立する。この関係は、図1のように単純化して図式的に示すことができる。（佐久間鼎，1959）また、日本語の構文の特色として、ヨーロッパ諸言語と異なる著しい点は、第一人称および第二人称の主格を形式的に表わす必要がないことである。このために、これらの代名詞の形式は、ヨーロッパ語に比較すればその種類がきわめて多いし、またこれらの代名詞としての機能の面においても異なった特質を認めなければならない。しかしながら、いま、問題を対称の代名詞の使いかたということだけに限って考えるならば、対話の場面における

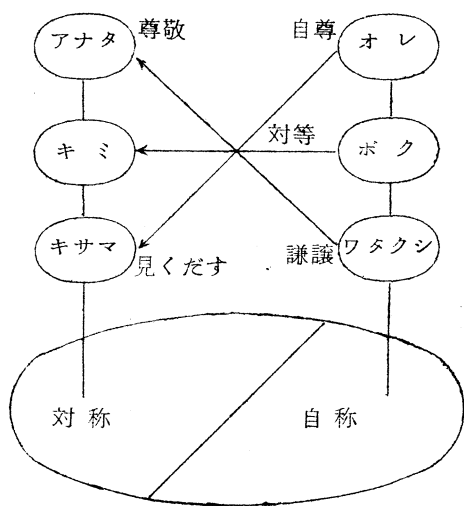


図 1

これらの代名詞の選択のしかたに関して、現代ヨーロッパ諸言語と日本語などの非ヨーロッパの言語との間に共通した特徴を認めることができる。すなわち、話者が現実の対話の場面において行い対称の代名詞ないし話相手に対する呼びかけの語詞の選択は、二つの次元——力 (power) と結合の固さ (solidarity)——に密接な関係を有するというのである。これらの二つの次元は、あらゆる社会生活の分析に対して基本的な要因であると考えられている。(Brown と Gilman, 1960; Brown と Ford, 1961, Brown, 1965)

力ないし権力は、社会における個人の相対的地位 (status) に関係があり、話者とその相手との結合の固さは、両者の親密性 (intimacy) と不可分のものである。以下、現代ヨーロッパ、アメリカ合衆国、および日本における対称の代名詞ないし話相手に対する呼びかけの語詞の一般的形式を、現在に至るまでのその歴史の変遷の過程をたどりながら、上述の地位および親密性の二つの規準との相関関係に基づいて考察してみよう。

1) 地位の規準

人間社会においては、個人がその社会にとって価値ありと認められる特性をどの程度に有するかによって、人々の間に差別が生まれ、その差別が社会的地位を構成する。そのような地位の差別を生ずる要因としては、身体的な力、運動技能、血族組織内における個人の位置、性別、家柄、職業、財産、組織体内における役割などの特性があげられる。これらの特性のどれかに関して、相互に差のある二人の個人の間の地位の関係は、つねに非相互の関係であり、一方が他方に対して優位にあるならば、他方は必ず劣位になければならない。したがって、地位の異なる二人の間では、対話の場面において用いられる対称の代名詞は、下位から上位に対しては尊敬を表わす形式が、また上位から下位に対しては見くだすという心持で呼びかける形式が行われるであろう。記述を簡単にするために、現代ヨーロッパ語や日本語における対称の代名詞のうちで、tu や du やキミなどのような親しみを表わすものを T で、vous や Sie やアナタなどのようなていねいさを表わすものを V で表わすことにすれば、中世ヨーロッパにおいては、貴族は一般平民に対して T を用いて呼びかけ、一般平民からは V

で呼びかけられた。また、一家の主人は奴隷や召使や従者に対してTを用い、かれらからVで呼びかけられた。家族の内部では、どの社会的階層においても、親は子に対してTを用い、子は親に対してVで呼びかけた。日本では、武士は町人に対してTを用い、町人は武士に対してVを用いた。一般的に言えば、上位者は下位者に対してTで呼びかけ、下位者は上位者に対してVで呼びかけるとするのが、非相称的な地位の間における対称の代名詞の使用に関する不文律であったといえることができる。

これに対して、社会には地位の同等な人々の組合せが存在する。地位の不等な人々の間では、代名詞の使用に関して上述のような非相互的な規則が適用されるが、地位の対等な人々の間では、代名詞の呼びかけは相互的ないし相称的でなければならない。封建時代のヨーロ

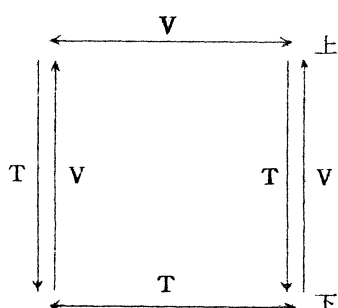


図 2

ッパあるいは日本においては、社会的に上層階級の人々の間では相互にVを、下層階級の人々の間では相互にTを交換したということが、当時の文学や記録によってうかがわれる。そこで、対象の代名詞に関する地位の規準は、図2に示すように、地位の不等な人々の間における非相互的なT-Vと、地位の対等な人々たちの間における相互的なVおよびTとからなると結論することができる。

2) 親疎の規準

地位の対等な二人の間関係は、親密な場合もあり、疎遠な場合もある。親密な間柄では、普通ことばづかいがぞんざいになりがちだし、疎遠な間柄では、礼を失しない程度にしていねいな話しかたをするのが普通であろう。したがって、対称の代名詞の用いかたにおいても、親密な間柄では、めしたに対して用いられるTを相互的に交換し、疎遠な間柄では、めうえに対して用いられるVを相互的に用いるようになるのが自然のなりゆきと考えられる。そこで、地位の規準と親疎の規準とが組合わされて、図3に示すような、TとVの使用に関する整然とした体系ができ上る。

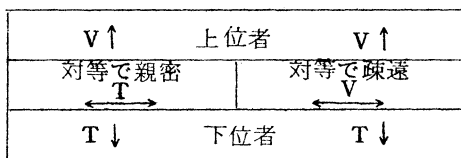


図 3

ところが、親疎の規準は、地位の対等な間柄だけでなく、地位の不等な二人の間にも適用することが可能である。たとえば、親子とか兄弟の間柄、主人とその家に古くから仕えている召使との間柄のように、相互に親密な関係にある場合と、レストランの客と給仕、士官と兵士、雇主と使用人の間柄のように、相互にそれほど親密でない関係にある場合とがある。これらの関係を考慮に入れるならば、図3の体系は、図4に示すように6個のカテゴリーに分かれることになる。これらの中で、左上と右下のカテゴリーに属する人々にとっては、地位の規準と親疎の規準とがたがいに矛盾する葛藤状態を生ずる。すなわち、左上の場合は、

上位で親密 V ↑ T ↑	上位で疎遠 V ↑
対等で親密 T	対等で疎遠 V
T ↓ 下位で親密	V ↓ T ↓ 下位で疎遠

地位の規準はVを用いることを要求するが、親疎の規準はTを用いることを要求する。右下の場合は、その逆で、地位はTを、親疎はVを要求する。

3) 二つの規準の間の葛藤の解決

地位の基準は、封建制度、領主制度と密接に結びついて確立されたものである。これに対して、親疎の規準は、階級のない社会、および平等の思想とともに発展した。近世ヨーロッパにおいては、都市の発達によってすべての人々は平等に昇進することができるようになった。このような情勢の中で、二つの規準の間の葛藤は、地位の規準を抑圧して親疎の規準を優先させることによって解決された。その結果として、現代のフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語などにおいては、対称の代名詞に関するかぎり、地位の規準は棄てられて、親疎の規準のみがその選択を支配する唯一の規則となったのである。これに対して、現代の英語はこれらとは異なった解決法をとった。それは、2種類の形式のうちの一つを抑圧することであった。すなわち、thou が抹殺されて、ye の変形である you のみが残されることとなったのである。

4) 代名詞以外の対称の語詞の選択における地位の規準

現代ヨーロッパ語における代名詞の使用に関して、地位の規準が抑圧されたということは、地位の要因が、社会における二人の個人の間の相互作用を支配する原理として排除されたということを意味するものではない。現代ヨーロッパおよびアメリカの社会は、非相互的なVおよびTの使用をもはや許容しなくなったけれども、一方ではなお依然として、他の種類の

非相互的な対人的呼びかけを用いることを許している。それは **first name** に対する **title** の交換である。このことは、最も親密であるべき家族の内部において見ることができる。すなわち、家族の構成員の中で乍上の世代のものに対しては、血族関係を表わす称号、たとえば、“**Father**”とか、“**Papa**”とか、“**Grand father**”など、が用いられ、年下の世代のものに対しては、**first name** の呼称が用いられるのが普通である。

Brown と Ford (1961) によれば、アメリカ人が非相互的な **first name** (FN) と **title with last name** (TLN) を使用するのには、対話者どうしの間に実質的な年令の開きがある場合と、職業的地位の差異がある場合であるという。すなわち、子どもはおとなに対して TLN を用い、おとなは子どもに対して FN を用いる。おとなどうしの間では、およそ 15 才以上の年令の開きがある場合に、年長者は年少者に対して FN を用い、年少者は年長者に対して TLN で呼びかける。また、職業的地位の差異については、直接の永続的な主従関係がある場合（たとえば、主人と召使、雇主と使用人、士官と兵士など）と、直接ではあるが一時的な主従関係におかれた場合（たとえば、床屋とその顧客のようなサービス業における人間関係）と、直接ではないが永続的な職業的地位の上下が一般に認められている場合（国會議員と消防夫というような関係）とがある。現代ヨーロッパ語においても、これとほとんど同じ規準に従って **title** と **first name** とが使い分けられている。

上述のように、現代ヨーロッパおよびアメリカ語において、代名詞の使用に関しては地位の規準が抑圧されたにもかかわらず、**title** と **name** に関してはそれが温存されているのはなぜであろうか。その理由の一つとして考えられることは、言語学的な強制の程度という問題である。すなわち、**title** や **name** の使用に関しては、対話の場面においてそれを使用しなくては使わずにすまずことができるけれども、代名詞の使用に関しては、ヨーロッパ語における構文的な制約から、これを回避することができない。たとえば、フランス語で命令文でない文において **tu** も **vous** もどちらも使わずに話したとしても、動詞の抑揚の中にそのどちらかであることが暗示されることになる。したがって、もし代名詞の選択を支配する地位の規準があるとすれば、話者はその話相手に応じてつねにその規準に従った代名詞の選択を行うことを強制されるわけである。これに対して、**title** と **name** は強制的な形式ではないから、談話の際に、相手の地位に関する表現をしなくておくことが可能である。日本語の場合には、前に述べたように、人代名詞の第一人称および第二人称の形式を表わさずにおくことが構文的に可能であるから、代名詞の形式においても地位の規準が抑圧されなかったと見ることができる。したがって、非相互的な T-V の関係を保持したままで親密さの度合を高めることが十分に可能である。このことは、日本人の特有の階級意識を反映している

と見ることもできるが、また一面においては、日本語の構文的特質からもたらされた結果であると解釈することもできる。したがって、ときには、話者がことさらに相手の地位に関する表現を避けようとして、必要な対称の代名詞さえ用いないために、文の意味があいまいになることがある。

それでは、対話の場面において、話者が相手の地位に関する表現を避けたほうが望ましいと感じるのは、どのような場合であろうか。それは、地位の規準と親疎の規準とが葛藤を生じるような場合である。たとえば、最初は二人の間に地位の差があったけれども、長い交際の中に、一方の地位に変化を生じて二人の地位が対等になったような場合、あるいは二人の間の相対的な地位の変化がなくても、最初から二人の間にそれほど大きい地位の差がなくて長期間の交際を続けているというような場合である。このような場合に、アメリカ英語の話し手は、**title** と **name** に関するかぎり、ある時期に急に沈黙におちいるといわれる。幸にして、このようなときに英語には地位に制約されない “**you**” という形式がある。そこで、両者の間で新しい言語習慣が不自然でなく感じられるようになるまで、話し手はしばらくの間 **FN** も **TLN** もどちらも使用しないですますことができるのである。

現在、代名詞に **T** と **V** の二つの形式を有する言語では、すでに述べたように、その選択に関する非相互的な地位の規準は棄てられ、相互的な親疎の規準のみによって選択が行われるようになった。そこで、はじめて知合いになったというような疎遠な間柄の二人の間の対話は、最初相互的 **V** によって始められ、時間の経過とともに親密さの度合が高まるにつれて、相互的 **T** へと移行する。しかし、**V** から **T** への移行は、その当時者にとって重大な変化である。新しい習慣はもちろん相互的でなければならないが、二人がまったく同時に変化するのでなければ、その移行過程において必然的に非相互的にならなければならない時期がある。その場合には、そのような変化を行うことを、二人のうちのどちらが先に提起するかという問題が生じる。二人の間に明白な地位の差がある場合には、そのような変化をさきに始めるのは、普通上位者のほうである。そのことに関しては上位者は比較的自由的な立場におかれているわけである。これに対して、下位の人たちは、あまり早く **V** から **T** に移行してしまうことは上位の人からなまじきだと思われるかもしれない。したがって、ある期間あらゆる呼びかけのことばをできるかぎり回避しようとする不安定な状態におかれるわけである。しかし、親密さの感情が両者の関係を優勢に支配するようになれば、そのような不安定な状態もまもなく解消されるであろう。

参 考 文 献

- Brown, R., & Gilman, A. *The pronouns of power and solidarity*. In T. Sebeok (Ed.), *Style in language*. New York: Wiley, 1960
- Brown, R., & Ford, M. *Address in American English*. J. abnorm. soc. Psychol., 1961, Vol. 62, 375 - 385.
- Brown, R. *Social Psychology*. New York: The Free Press, 1965.
- 佐久間鼎, 日本語の言語理論, 恒星社厚生閣, 1959.

SOCIO-PSYCHOLOGICAL STUDY OF PRONOUNS OF ADDRESS

Akira Sakuma

When one person speaks to another, he has to choose some of address forms according to his actual condition. Although there is only one pronoun of address, you, in modern English either for addressing any sort of single person or for addressing more than one person, in most of the modern European languages and even in the non-European languages (e.g. Japanese), there are still two or more singular pronouns of address. In French, a single addressee may be called either tu or vous, in German either du or Sie, in Italian tu or Lei, and in Japanese, the speakers are required to choose one among numerous pronouns of address (e.g. anata, kimi, omae, kisama, etc.).

Forms of address always follow the rules that are made by the entire society. The most important governing condition is the relationship existing between the two persons concerned, i.e. the speaker and his addressee. All societies have rules of address. We find that address forms are always governed by the two fundamental dimensions: solidarity and status. These two appear to govern much of social life as well as of linguistic address.